

平成31年度学校経営計画に対する中間評価報告書

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の取組
1 生徒指導の方針・基準に一貫性を持ち、毅然とした指導で、基本的な生活習慣の定着と規範意識の高揚を図る。	① 挨拶を含めた所作の指導を、学校生活の中で行う。	学校に関係する方々にはもちろん、生徒間の挨拶も積極的にできる生徒の割合が、 A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	78.1% 判定D	自らすすんでよく挨拶している生徒は全体で78.1%で、昨年同期と比較して5.7ポイント減少した。学年別では、2・3年に比べ1年生で積極性に欠ける割合が高い。 今後も職員の率先垂範はもとより、「遅刻ゼロ・挨拶運動」の取組を通して積極的な挨拶指導を図るとともに、学年・特活課・生徒指導課が連携し学校全体へ浸透させていく。
	② 望ましい服装容儀や規範意識の向上に対して全教職員が積極的に指導にあたる。	服装容儀等について積極的に声かけをしている教職員が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	87.9% 判定C	挨拶、服装容儀で積極的に声かけを行っている教員が87.9%であり、昨年同期とほぼ同値であった。学校のルールを守れない等、規範意識の低下は、いじめ、ネット上での誹謗中傷など生徒指導上の問題行動の背景ともなるので、今後も職員全体でルールを守ることや礼儀正しく人と接すること、節度ある生活を送ること等、規範意識の向上に努めていく。
	③ 規則正しい生活習慣と機敏な行動を確立するよう指導することで、遅刻の減少に努める。特に朝の始業5分前に着席するよう強く指導する。	1年あたりの遅刻人数が、 A 20%以上減少した。 B 15%以上減少した。 C 15%未満の減少であった。 D 減少しなかった。	34.7% 判定A	昨年同期と比較して学校・授業間遅刻ともに大幅に減少している。 「遅刻ゼロ・挨拶運動」や遅刻が常習化していた生徒への指導を、生徒指導課のみならず学年団・教育相談室、部活動等で連携し、多面的な指導を行うことで、大幅な減少に繋がっている。今後も校内の指導体制を継続し、家庭と連携しながら、粘り強い指導を行っていく。
	④ 全職員が連携して「いじめ」が根絶されるよう努力する。	「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	96.5% 判定A	アンケート調査等の結果、いじめは3件あり、指導及び生徒の相談に対処している。SNS上の書き込みや自分本位のコミュニケーションが原因のトラブル等が多く見受けられる。今後も、いじめ対策委員会やいじめアンケート結果等できめ細かな状況把握に努め、早期発見・早期対応を旨とした指導を行い、いじめの根絶に向けて学校全体で臨む体制を推し進めていく。
	⑤ ゴミの分別を通して、環境美化の意識が向上するよう指導する。	ゴミを正しく分別できていると考えている生徒・教職員の割合が A 85%以上 B 80%以上85%未満 C 75%以上80%未満 D 75%未満	生徒 96.5% 判定A 教職員 97.3% 判定A	アンケート調査の結果からは、高い水準で目標が達成されている。しかし、少数ではあるが環境美化の意識が低い者もおり、さらに環境美化向上の意識付けをしていく必要がある。

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の取組
2 授業のユニバーサルデザイン化を推進するとともに、家庭学習時間や読書量の増加を図り、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。	① 様々な背景や問題を抱えた生徒を理解するために教員が連携できる体制を整え、学校外からも助言を得ながら適切に支援できる能力の向上を目指す。	個々に応じた指導内容や生徒主体の学習活動を取り入れている教職員の割合が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	84.4% 判定D	職員の自己評価では、全体としての肯定感は昨年同期より減少したものの、「そう思う」と答えた割合は増加しており、職員間での意識や取り組みに差異が見られる結果となった。様々な背景や問題を抱えた個々の生徒の課題発見や的確な対応のためには、教科会を軸とした校内体制づくりを整備する必要がある。また、2022年度からの新学習指導要領の年次進行に備え、ALや議論、発表等、主体的に学ぶ授業づくりの実践に努めていく必要がある。
	② 教科でテーマを決め、また、互いに授業を参観することにより授業力の向上を図る。少人数であることを活かした効果的な授業を行う。	授業で充実した学習活動の時間を持つことができると答えた生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	87.4% 判定C	1・2年生では、クラス間により充実度に関きが見られた。少人数クラス等の特性を活かし、生徒の現状を把握し、個々に目標を持たせた授業実践を工夫、改善を図っていく。
	③ 個に応じた進学指導、就職指導を充実させることにより、自分に自信を持たせ、希望する進路を実現するよう努力させる。	年度末の進学状況において、国公立大学合格者が、 A 5名以上 B 3～4名 C 2名 D 1名以下	1学期は未実施。	
		11月末の就職状況において、就職希望者の内定率が、 A 100% B 95%以上100%未満 C 90%以上95%未満 D 90%未満	1学期は未実施。	
	④ 家庭学習調査を行い、その状況を分析し、課題の出し方を適切に工夫したり、担任が面談したりすることで家庭学習の習慣を身につけさせることにつなげる。	家庭学習の時間を確保している生徒の割合が、 A 60%以上 B 50%以上60%未満 C 40%以上50%未満 D 40%未満	54.8% 判定B	昨年同時期に比べ家庭学習時間を確保していると思う割合が高くなっている。1年次は確保している生徒が多いが、2年次は低い。2年次に学習時間を確保するため、課題の工夫等の方策が必要である。
⑤ 学校図書室の取り組みを活性化し、積極的に読書に取り組ませる。	図書室での年間貸出冊数が、 A 2,000冊以上 B 1,800冊以上2,000冊未満 C 1,600冊以上1,800冊未満 D 1,600冊未満	1学期は未実施。 7月末の貸出冊数は400冊。	昨年度同期に比べ、約200冊の減少となった。図書委員会による本紹介のPOPづくりやスタンプラリー等、読書の楽しさを伝える活動は展開されており、秋以降の増加に期待している。また、学年団や国語科と連携し、朝読書の実施や読書指導の充実を図っていく。	

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の取組
3 教育活動の速やかな情報発信と地域社会と連携したボランティア活動の推進で、地域や保護者から信頼される開かれた学校づくりに努める。	① PTA関係行事の情報提供や、メール配信による連絡を確実にすることにより、学校が開かれていると感じる保護者の割合を高める。	学校は、開かれた学校づくりに取り組んでいると感じている保護者が、 A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満	95.4% 判定A	すべての学年で高い数値であった。開かれた学校づくりに向けて、保護者のみならず地域社会との連携・協働体制の整備に努めていく。また、学年団と連携を密にし発信・配信体制の改善を図っていく。
	② 中学生やその保護者に本校の教育活動をより理解してもらえるよう、ホームページの内容を充実させる。	ホームページのアクセス数が A 9万件以上 B 8万件以上9万件未満 C 7万件以上8万件未満 D 7万件未満	1学期は未実施。 7月末のアクセス数は29,899件。	4か月で約3万件のアクセス数があり、このペースを維持していけば、A判定の達成が可能である。 さらに訪問者数を増やすために、記事内容をよりわかりやすく掘り下げるとともに、更新頻度をあげていく。
	③ 生徒・教職員・保護者が一体となり、地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組み、地域とのつながりを深めていく。	地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組むことができたと思う教職員の割合が、 A 80%以上 B 70%以上80%未満 C 60%以上70%未満 D 60%未満	1学期は未実施。	
4 教職員自ら、これまでの働き方を見直し、限られた時間の中で、教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保できるようにする。	① 各教職員が自らの勤務時間や業務内容を的確に把握し、超過勤務時間の縮減に努める。	超過勤務時間を昨年度より減少させることができた (ア)よくあてはまる (イ)ほぼあてはまる (ウ)あまりあてはまらない (エ)あてはまらない (ア) + (イ)の割合が、 A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満	70.9% 判定C	昨年度、超過勤務の縮減に取り組んだと思う職員の割合が93.6%の状況から更に減少させる取り組みであるが、年度当初の生徒指導を含む多忙や部活動における各種大会などがありC判定となっている。毎月の調査では昨年度よりも減少しており、目標達成を目指し、職員への声かけを継続していく。
	② 部活動において、顧問と生徒が共通の目標を持ち、効率的・効果的な活動に取り組む。	限られた時間の中で、効率的・効果的な活動に取り組んでいる部活動が、 A 80%以上 B 70%以上80%未満 C 60%以上70%未満 D 60%未満	教職員 77.4% 判定B 生徒 70.3% 判定B	教職員、生徒ともに70%台であった。総体・総文も終わり新チームへと移行する中で、部活動の在り方や練習方針についての共通理解を図り、効率的な活動に取り組んでいく。